

文=安藤 健(本誌) 写真提供=デヘラー  
text by Ken Ando (Kazi), photos by Dehler

デヘラー

# DEHLER

ヨットやボートの世界には、ボートビルダーはもちろん、帆装品やセール、ウエアに至るまで、歴史ある海のブランドが数多くある。自然という厳しい現場の中でもまれ、ユーザーの期待に応えてきたからこそ、信頼を勝ち得てきたのだろう。当連載では、そんな世界のマリンブランドの数々を取り上げ、あまり知られていないそれぞれの歴史を紹介していく。今回は、ドイツの老舗ヨットビルダーであるデヘラーを取り上げる。

パフォーマンスヨットが中心のラインナップは、日本でも多くのファンの心をつかんでいる。

## 時代を変えたヴァリアンタ

ドイツのパフォーマンスヨットビルダーとして知られるデヘラー(Dehler)は、日本でもおなじみのブランド。その歴史は長く、今年でちょうど創業50周年の記念イヤーを迎える。

発祥は1963年、ドイツ(当時は西ドイツ)の内陸部にあるフライエノールという町に、ヴィリー・デヘラー(Willi Dehler)がヨット専門の造船所を立ち上げたことに遡る。

その理由というのが興味深い。デヘ



デヘラー社が自信を持って送り込んだ、最新モデルのデヘラー 38。船体後方の幅を十分に持たせるスタイルが特徴的だ。創業者の息子であるカール・デヘラーが中心となって開発に取り組んだ

## THE HISTORY OF DEHLER

1963	ドイツ内陸部のフライエノールという町で、ヴィリー・デヘラーがヨット専門の造船所を立ち上げた。
1966	ヴァンデュッタット設計のヴァリアンタが、ハングルク・ポートショーアでデビュー。全長6.5mのFRP製トレーラブルボートは、瞬く間に爆発的なヒットを記録した。
1969	オブティマ83を発表。その後、デランタ76、オブティマ92、さらにはディンギー(470級)など、取り扱い艇を毎年のように増やしていく。
1973	デヘラー社が、バンデュッタット造船所を買収。ヴァンデュッタットは、以後、業務をデザインの分野一本に絞り込むこととなった。また、年商は1,200マルク(当時約16億円)にも達し、中部ヨーロッパでも屈指のプロダクションヨットビルダーに成長。
1976	モントリオール五輪の470級で、同社の470を使つた選手が金メダルを獲得。
1977	スプリントスポーツを発表。1980年にはORCのオフショア・ワンデザインクラスに、ドイツ艇と

1980	して初めて採用された。
1984	db1(db2)がデビュー。ノースシー・レースウイークの全レースで1~3位を独占したことを皮切りに、SORCクラス制覇(1982年、1984年)、3/4トンワールドでの上位独占(1984年)など、レースシーンに旋風を巻き起こす。
1988	db2のハルを使ってクルージングタイプにしたデヘラー34を発表。累計1,200隻が建造される大ヒットとなった。同年、東京(晴海)で開催されたドイツ博に、国内1号艇となるdb2が展出された。
1995	セントラルウインチシステム(CWS)を採用したデヘラー36CWSがデビュー。
2004	ヴィリー・デヘラーが、社長を退任。デザイナーはユーテル・フローリックが登用されるようになった。
2009	デヘラー47が、ヨーロッパ・ヨット・オブ・ザ・イヤーを獲得。
2013	ハンセグループの資本傘下に入った。最新モデルのデヘラー38がデビュー。

ラーの会社は、もともとは浄化槽などFRP製品の製造を手かけていたのだが、その技術力に目をつけ、造船業への進出を呼びかけた人物がいた。それは、当時、S&S(Sparkman & Stephens)と並び、ヨットの造船・設計の世界では双璧を成していた、オランダのバンデスュタット(Van de Stadt)である。時は、木造艇からFRP艇への過渡期の始まりともいえる時代。軽くて強度に優れ、なおかつコストの安いFRPをもってすれば、プロダクションヨットの世界を大きく変えられるというわけである。

同社では、創業後にまずは400隻程度



創業者のヴィリー・デヘラー。もともとはFRP製品の製造を手かけていたが、FRP艇黎明期に造船業に乗り出し、ドイツ屈指のビルダーに育て上げた



db1は、デビューするやいなや世界のレースシーンを席巻することになった。写真的db2は、ほんの少しだけ変更があったもので、基本的にはdb1と同じモデルと考えていい

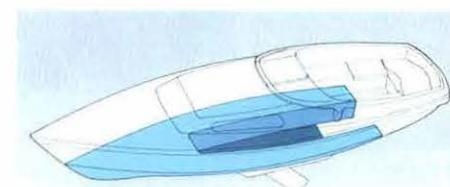
のヨットを建造したようだが、デヘラーとヴァンデスュタットのタッグが最初のモデルを送り出すまでに、3年の歳月を要した。1966年のハンブルク・ポートショーで、ついにヴァリアンタ (Varianta) がデビューする。

このモデルは、全長6.5m、FRP製の頑丈で軽量なハルを持ち、起倒式マストと昇降式のリフティングキールを備えるトレーラブルボート。スタビリティーを確保するためのウォーターバラストを採用し、不沈構造であることなど、新しいアイデアもふんだんに盛り込まれていた。家族4人がキャンプをすることをイメージして作られたヴァリアンタは、當時で100万円ほどという価格もあって、まさに新時代にふさわしい理想的なヨットとして、爆発的なヒットを記録した。

このヒットがどれくらいのものかというと、例えば、翌年の同社の年商は180万マルク(当時で約2億3,000万円)にも成長した。社員は15人、1モデルしかラインナップしていないデヘラーが、45人の社員を抱える名門のバンデスュタット造船所と同額の年商を記録したのだから、FRP艇の建造が、いかに時代を先取りする効率的な事業であったかお分かりいただけるだろう。時代の寵児となったヴァリアンタは、その後2回のマイナーチェンジが施され、



わずか6.5mの船体に、ヒットするためのあらゆる要素が盛り込まれていたヴァリアンタは、プロダクションヨットの歴史に名を残すモデル。累計4,500隻以上が建造された



上：この時代にウォーターバラストという発想を取り込んだことは、驚きに値する。水を抜いた運搬時には軽く、水を入れた帆走時にはスタビリティーの向上に寄与した  
右：トレーラーで運んでいろいろな場所に出かけ、家族4人が泊まるには十分なスペースがある。天井のABS樹脂による造作など、細かなところまできちんと作り込まれている



1982年までの間に累計4,500隻以上が建造された。

## レースの世界に進出

ヴァリアンタの大成功によって、1973年には、デヘラー社はヴァンデスュタット造船

所を買収。このころには年商は1,200万マルク(当時で約16億円)にも到達しており、ドイツはもちろん、中部ヨーロッパでも屈指のプロダクションビルダーとして躍進を遂げていた。

そんななかで、デヘラーが次に針路を向けたのは、レースの世界だ。今でこそ信じられないが、当時はレーシングデインギーの建造も手がけていた。1976年のモントリオール五輪では、470級の金メダリストがデヘラーの艇を使っている。また、1977年に発表された全長7.3mのスプリントスポーツ (Sprinta Sports) というモデルは、1980年にはドイツ艇として初めて、ORCのオフショアワンデザインクラスに採用された。

そして、レースの世界で顕著な活躍を見せたモデルとして、忘れてはならないのが1980年にデビューした34フッターのdb1(途中からdb2)である。当初はワンデザインクラスを意図して企画されたが、予想を上回る活躍によってIORレーサーへと変身を遂げ、1982年と1984年のSORCクラス制覇、1984年の3/4トンワールドでの上位独占(1~3位、5位、8位)など、高い戦闘能力を世界に見せつけた。現在、同社の開発部門に籍を置く、ヴィリ



ヴァリアンタのヒットの後、1980年代まではデインギー(470級)も手がけていた。1976年のモントリオールでは、金メダル獲得艇を出した



デヘラー社が考案して導入したセントラルウインチシステム(CWS)。安全性、省力性の向上を図ったこのアイデアは、現在の事情を思えば、先見の明があったといえよう



レースの世界ではばらしい成績を残したdb2のハルを使い、クルージングモデルとしてデビューしたデヘラー34。累計1,200隻が建造されるヒット作となつた



1984年に東京の晴海で開催されたドイツ博には、正面入り口の前にdb2が展示された。ドイツを代表するビルダーのヨットが、多くの来場者の注目を集めた



新時代のデヘラーを示唆するかのようなデザインで2012年にデビューしたデヘラー41。幅広の船型を採用することで、長い水線長を確保したパフォーマンスクラーザーだ



41ftだけに、船内空間はボリュームたっぷり。この41に限らず、船内のレイアウトや使用する木材の色目は、数種類のなかから選べるようになっている



ビームいっぱい近くまで幅のある開閉式トランサムゲートを開くと、大型のスイミングプラットフォームが出現する

の息子のカール(Karl)はセーラーであり、当時はヘルムスマンとして、これらのキャンペーンを戦った。

その後、1984年には、db2のハルを使ってクルージング向けにリモデルしたデ

ヘラー34がデビューし、建造累計1,200隻を超えるベストセラーを記録した。デヘラーの名とサイズを組み合わせたシリーズは、ガチガチのレース志向ではなく、居住性能にも配慮し、クルージングを視野に

入れたオーソドックスなモデルであり、31、22、372、38、25、28と、その後もバリエーションが増えていった。

ところで、ヴァリアンタを例に取るまでもなく、デヘラーには、革新的なアイデアを随所に取り込んでいくという特徴がある。それは、デヘラーラしさそのものであると言つていいかもしれない。1988年に登場した36CWSも、それまでのプロダクションヨットにはない、斬新なシステムを取り入れていた。

CWSとは、Central Winch Systemの略で、その名のとおり、コクピットのステアリングポストのすぐ前に、電動ウインチを一つ配したシステムだ。ここにハリヤードやシート、コントロールロープなどをすべて集中させ、安全なコクピットから出ることなく作業ができる。しかも、電動ウインチだから指一本で動かすことが可能で、ショートハンドル向け儀装としてのメリットも大きい。アンカーを上げる際には、ウインドラスとして利用することも可能だ。

最近でこそ、電動ウインチやメインファーラーといったショートハンドル儀装は一般的だが、当時としてはこのアイデアは斬新なものだったといえる。36db、37CWS、39CWS、43CWS、35CWSと、その後もシリーズが登場し、好評をもって迎え入れられた。



昨年デビューしたデヘラー41の流れをくみ、今年デビューした最新モデルのデヘラー38。クルージング向け、レース向けなど3種類のパッケージが用意されている



デヘラー41のメインサロン。工業製品ライクでありながら、高品質であることを感じさせる船内空間。シンプルでありながら、セティーの背もたれの上の部分のデザインなど、細かな部分へのこだわりが見て取れる



トイレとウォッシュボウルは、同じ空間にまとめられることが一般的だが、あえて扉を設けて分けている。手洗いスペースのドアを開放すれば、メインサロンと空間をつなぐことが可能

## 半世紀の歴史は続く

創業以来、デヘラーのモデルの設計は、一貫してヴァンデスュタットが手がけてきた。しかし、1995年にヴィリガ社長を退任すると、以後、基本的にはユーデル／フローリク (Jedel/Vrolijk) がこれを手がけることになる(一部はSimonis/Voogd)。現代風のパフォーマンスクルーザーと呼ぶべきモデルが中心となっていき、2004年には、デヘラー 47がヨーロッパ・ヨット・オブ・ザ・イヤーを獲得している。

一方、資本をめぐるターニングポイントとしては、2009年に同じドイツのハンゼグループの傘下に入ったことが挙げられる。ハンゼグループは自社ブランドに加えて、イギリスのムーディーヨット(Moody Yachts)など複数のブランドを持っているが、各ブランドの棲み分けをきちんと線引きしているようだ。

デヘラーの現在のラインナップは、29、32、35、35SQ、38、41の6艇種。このうち、最新モデルの38は、ヨーロッパ各地のポートショーでも高評価を得ている注目の1艇である。キールは3タイプ(スタンダード、シャロー、レース)、パッケージも3タイプ(クルージング、エンターテインメント、レース)が用意され、ユーザーの使用目的に合わせて選択が可能。カーボンマストのオプションも用意されており、レースシーンでの高い性能も期待できそうだ。船内空間においても、例えばトイレと手洗い場(ウォッシュボウルのある空間)とを仕切りで分け、床面に段差を設けずバリアフリーにするなど、斬新なアイデアを常に盛り込むデヘラーラしさが発揮されている。前年にデビューした41に続き、高品質のパフォーマンスクルーザーとしての性格を、より強めた格好だ。

50年の歴史を持ちながら、木造艇ビルダーを出自とするだけでなく、FRPのプロから始まっただけに、FRP造船に関する高いノウハウを持つことは言うまでもない。積層については、基本的にハンドレイアップ工法を用い、バルサコアのサンドイッチ材を使用している。ハンゼの傘下に入った後は、デヘラーの伝統と技術に加え、ハンゼが誇る最新の設備や大量生産のノウハウを共有したことで、よりハイクオリ



一時期60ftを超えるモデルを手がけたこともあるが、やはりデヘラーは30ftから40ftクラスの艇を得意としている。セーリング中のデヘラー 35



現行のラインナップでは最も小さいモデルとなるデヘラー 29。ファミリークルーザーという位置付けだが、クラブレースも十分楽しめるような仕様になっている



2012年にデビューしたデヘラー 35SQ。流行している大型のトランサムゲートをいち早く採用している。モデル名のSQは、スピード(Speed)とクオリティー(Quality)の意



国内にも数艇が上陸しているデヘラー 32。日本の泊地事情を考えても、ぴったりのサイズのモデルだ。ヘルムはホイール仕様となっている

ティーな製品を供給できるようになったであろうことは、想像に難くない。

デヘラーがこれまでに建造してきたヨットは60モデル以上、その総数は22,000隻を超えるという。クルマの世界におけるメルセデス・ベンツやBMW、フォルクスワーゲン、アウディを例に取るまでもなく、ドイツといえば、機能性に富んだ高品質の

工業製品を得意とすることは言うまでもない。伝統あるデヘラーも同じく、プロダクションヨットの世界で、これからも満足度の高い製品を生み出していくはずだ。

問い合わせ  
イチ・サン・ゴ・イースト  
TEL: 0798-32-1350 <http://135-e.com/>